

アヴァール人とハンガリー人

堀内 一徳

はじめに

ほとんどの人の住まない広い土地に、孤立した蛮族たちがまばらに残存していると、六世紀中頃のパンノニアについて、ビザンツの歴史家プロコピオスは記している。¹⁾

アッティラの死後、後継者の争いやアッティラに服属していたゲピドをはじめゲルマン諸族の反乱によって、パンノニアのフン族国家は崩壊し、ドナウ中流域では、スキリ、スエヴィ、エルリ族などのゲルマン部族やイラン系サルマト族の興亡や東ゴート・アマール (Amal) 家の二人のテオドリックの抗争が展開された。東ゴートの撤退ののち、六世紀はじめには、ドナウ支流ティサ川の流域とトランシルヴァニアに拠ったゲピド族がビザンツ都シルミウム (Sirmium) を占拠し、ランゴバルド族はモラヴィアと下オー

ストリアを占領したエルリ族を、六世紀半ばにはゲピド族を征服する。しかし、ランゴバルドは、ゲピド族との戦いに同盟したアヴァール人にその征服地を托してイタリアに去った。このランゴバルドのイタリアへの移動とアヴァール人のカルパティア盆地への定着は、しばしば古代末期民族移動の終末と解されている。

カルパティア盆地のドナウ川東部すなわちハンガリー平原ないしはオルフェルド (Alfold) は、ユーラシアのステップの最西部を形成し、カルパティア山脈によって、大ユーラシアのステップと劃されている。ドナウの西部 (トランスドナウ) は丘陵、山地と平原からなっている。六世紀後半から約二五〇年間、アヴァール人がカール大帝の征服に屈してのち、ハンガリー人 (マジヤール人) によってカルパティア盆地は占拠されたが、中央アジアの遊牧民で

あるかれらの社会が、この盆地において、かつて考えられたより農耕に基礎をおいていたことが明らかになっている。

伝統的な見解によると、遊牧民は犁耕を習得するのに大きな困難をとめない、かれらは農産物を征服民から徴集するか、侵略によって略奪するか、あるいは、かれらの定住地周辺の耕作に捕虜を使役したという。しかし、遊牧民が農耕を取り入れ定住生活に転換した例は、過去において少なからず存在するので、このような説は、今日かならずしも受け入れられない³⁾。遊牧はかならずしも農耕を排除しないし、遊牧民の生活も一樣ではない。

小論では、カルパティア盆地に定着したアヴァール、ハンガリー人がどのように農耕、遊牧の生活を営み、かつハンガリー平原の牧草地がかれらの略奪経済の軍事力である騎馬戦力をどう規定したかについて、述べてみたい。

(I)

アヴァール人の起源については、突厥に敗れた柔然 (Joum-jan) であるという説、あるいはフン族の一派 (白フン) との混成部族であるとする説などがあるが、今もっ

て定かでない。しかし、バイアン (Baián) 汗に率いられて、ハンガリー平原に移動したアヴァール人は、突厥の支配領域から離脱し西方に移動したアジア・アヴァールの一派で、混成部族であることは、アヴァールの文化における柔然、エフタルの領域やコーカサス地方の文化の混成が、それを示している³⁾。アヴァール人が占領したハンガリー平原は、カルパティア山脈によって半弓形に囲まれ、ドナウとティサ川が貫流し、草原と森林と湿地が大部分を占め、乾燥したステップあるいは砂地の荒野が散在し、平均気温は現在より高く、一〇度ないしはそれを超え、年降雨量は八〇〇ミリ程度で、オーク、松などが育成し、草地はハインブルグ (Heinburg) の山地の南斜面、ウィーンの森の東部斜面やノイジードラー (Neusiedler) 湖にも拡がっていた。現在、果樹やライ麦の栽培や放牧場で知られるドナウ・ティサ両河間の地域は、黄土が後退し砂地が拡大し、ティサ川左岸のケレス (Körös) 地方は砂層の湿地帯であった。平原の北東部のニールシェーグ (Nyírség) 地方はハンガリー平原の原景をもっとも純粋にとどめ、砂地の平原とアルカリ土のステップが占め、沼沢が草地を潤した。またドナウ支流ラーバ (Rába) 川に沿った丘陵の砂地には

櫻、ヨーロッパ樺が生育し、河川流域の湿地は茂みにおおわれていた。なおステップ的土壤は、東方にはトランシルヴァニアの原野にまでのび、カルパティア山脈周縁にまで達した。アヴァール人のおもな定住地は、ドナウ・ティサ両河間の地域、ティサ川支流のサモス (Samos)、ケレス (Keres) 両河の地域で、トランシルヴァニアのマロス (Maros) 川流域や森林地にもみられた。さらにドナウの西 (パンノニア) には、ローマ時代後期からの集落がなお存続していた。

このようなハンガリー平原の風土は、ユーラシアのステップ地帯の大部分のそれとは相違し、遊牧とともに農耕に適合し、その発展を可能にした。それでは、アヴァールの農耕はどのような形で営まれたのか、かれらの定住地の発掘調査のデータにもとづいて示しておく。

モハーチ (Mohacs) 近くのケルケド (Kölked) における発掘によると、ゲルマン系おそらくはゲピド族の農業集落の連続性が示されており、ゲルマン人のほか、おそらくはローマ人の後裔やスラブ人が農業生産に従事していたと推測される。またアヴァール人が農業生産にたずさわっていたことは、かれらの墳墓の多くに発見される鍬、草刈鎌、

手斧、小刀がそれを証明している。あるいは、出土の陶器類がアヴァール初期 (五六七—六七五年) より後期 (六七五—八〇四年) にかけて増加し、遊牧民になじまない容器の蓋が発見されているのも、それを語ってしよう。アヴァール後期の定住地において発掘された家畜の骨の比率に占める馬や羊の低率は、アヴァールの生活の経済的基礎が農業におかれていたことを示すものにほかならない。因みに、レオベルスドルフ (Leobersdorf) で発掘された人骨の調査によると、過重労働による骨の損耗や疾病の跡がうかがえるが、戦傷は認められないという。一方、遊牧生活について、アヴァール初期にはわずかなデータに局限され、富裕な戦士はどのように家畜を私有したのか、あるいは共有したのか、またかれら自らが飼育に従事したのか、考古学の資料からは判明しない。ただ、フレデガリウスの「年代記」によると、アヴァールの戦士は、毎年、おそらく農民と思われるスラブ人の近傍に冬の宿営地を求めたとあるが、この記述は、かれらの生活が農耕と結びつかないことを示している。では、アヴァールの定住形態であるが、いまのところ十分な調査結果が得られていない。天幕舎のほか、六世紀と推定される窪地に杭を打ち石詰を施し、焼粘

土の暖炉を設けた、ほぼ正方形の木造住居跡が発見されており、¹⁰⁾六、七世紀には、アヴァールの社会では都市集落にふさわしいような村落が形成され、またドナウ西方のケルニエ (Környe) のような数百の住民を数える六世紀の村落が発見されている。五〇の家屋跡と数百人を埋葬した墓地からなる定住地は、ヴァールパロタ (Várpalota) 、チャークペレニ (Csákerény) 、ラーツアルマーシュ (Racalmás) 、セクサールド (Szekszárd) 、メゼーファルヴァ (Mezőfalva) などで発掘されている。¹¹⁾アヴァール後期になると、アヴァール人の多くは長期間存続する村落に定住し、定住生活は定着した。六二六年から八〇〇年の間、すなわち七世紀後半のフランクのアヴァール戦争の時代を含む期間における、チェコスロバキア東部のブラティスラバ (Bratislava) 近くのテーベノイドルフ (Tebanodorf) のアヴァールの集落の発掘結果によると、約一〇〇〇のアヴァール人の墳墓の一〇パーセント弱が騎士の墓で、うち一八パーセントが富裕、一五パーセントが比較的富裕な層に属し、残る五二が貧しい層の騎士の墓であるという。そして、この集落のアヴァール人は大多数は自由人で、農業や手工業を営み、一部は武具を帯びていたという。¹²⁾なお七世紀はじめ

のハンガリー平原周辺部の村落の住民は、おそらく下層の自由民ないしは隷属民であったと推定される。アヴァールの定住地域は後期にいちじるしく拡大し、その境界は西はウィーンの森と東アルプス、北は今日のスロヴァキア、東はトランシルヴァニアとし、南はドラウヴァ (Dráva) 川とドナウ川に沿った。¹³⁾

ところで、ビザンツ皇帝マウリキウスの著作と称せられる「戦術の書」は、アヴァールの戦士の武装を次のように記している。甲冑に身をかため、剣(サーベル)、弓、騎士槍を具え、貴紳の乗馬は濠鉄板ないしはフェルト状のもので保護されている。¹⁴⁾こうした「戦術の書」に記される武装は、出土品によって裏づけられている。すなわち、アヴァール墓地で発見される副葬品の中に甲冑の部分、三翼状の矢鏃、矢筒、弓の断片のほか三メートルに及ぶ騎士の長槍、長剣、あるいは、随葬された馬勒や鎧などが出土している。¹⁵⁾弓はスキタイ・タイプの反射弓で獣骨や木片で強化され、放たれた矢の射程距離は五〇メートルに達し、アヴァールの騎士はこの弓を巧みに操り、疾走する馬から前後の方向に、一分間に二〇本の矢を放ったという。¹⁶⁾またこのような重装騎士のほかに一、二の武具を備えた軽装騎士

が加わっている¹⁷⁾。なお中世西欧の騎士の鎧は、アヴァールによって伝えられたとする説があるが、鎧は長期の間しだいに西欧に普及したのであり、この説をあまり過大評価することはできない。アヴァール初期には、アップル型の鉄製の鎧が典型的であったが、後期には水平の踏込部もつた蹄鉄形の鎧が知られている¹⁸⁾。アヴァールの軍隊は、糧食の輸送や敵を威圧するために馬の群をともなったので、秣の不足をまねくという¹⁹⁾。以上が「戦術の書」と出土品から構成されるアヴァールの騎士像であるが、I・ボーナ(Bona)によると、敵の甲冑を打ち砕く槍をたずさえたアヴァール重装騎士こそ、ヨーロッパにはじめて現われた真の騎士であるという²⁰⁾。それでは、アヴァールの騎士は、実戦でどのように戦ったか。それを伝える史料に乏しく、これらの戦闘行為の実像に迫るのはむづかしい。

メロヴィング・ガリアに侵入したアヴァール人は、シギベルト一世と戦って退けられ、五六五年の侵攻ではシギベルトを包囲、贈与を受納し和睦したが、アヴァールの軍隊については詳でない²¹⁾。五八〇年にはアヴァールの歩兵部隊が記録されている²²⁾。五七六年にスラブ人の侵入に対してビザンツ帝ティベリオスがバイアンに援軍を要請した戦いで

は、アヴァールの六〇、〇〇〇といわれる騎士がビザンツ領に送り込まれたと伝えられる²³⁾。また六二八年ビザンツに対する最後の大きな攻撃において、三〇、〇〇〇と称するアヴァールがコンスタンティノープルの外郭の囲壁の攻略に参加したとされるが、ビザンツの謀略にかかり、アヴァール軍は敗退している²⁴⁾。この二つのアヴァール騎士が登場した戦いで、かれらがどのように戦ったかは不明である。そして七九一年カール大帝のアヴァール戦争においては、フランクのメギンフレッド(Meginfred)の軍隊がカムプ(Camp)川沿岸のアヴァールの砦を攻略すると、アヴァールの防衛隊はドナウの南、ウィーンの森の近くの防塞の中に逃亡してしまった²⁵⁾。この事実は、アヴァールの戦士がすでに住民の生活に慣れてしまったことを示唆するものである²⁶⁾。なお、R・リンドナー(Lindner)は、アヴァール軍は大きな戦いには歩兵として戦ったと判断している²⁷⁾。

(二)

フィン・ウルゴ語族の一分枝であるハンガリー人は、ボルガ川支流カマ(Kama)川流域を居住地とし、イラン系

のアラン人やトルコ系のオングル (Ongurs) 人と交わり、七・八世紀頃原住地を離れ、半遊牧のハザール (Khazars) 人の支配領域に移動した。八世紀の後半ハザール帝国から離脱したハンガリー人は、ドナウ下流からドン川にのびる平原エテルケズ (Esterkes) に定着したが、八八九年トルコ系のペチェネグ (Pechenegs) 人に攻撃され、ハンガリーの七部族とハザール・カヴァールの三部族は、首領アルバード (Árpád) に率いられてカルパティア盆地に侵入した。カルパティア盆地のドナウの西方は東フランクが、今日のスロヴァキアの西半分をモラヴィアが、トランシルヴァニアとカルパティア盆地の南部をブルガリアがそれぞれ領有し、アヴァールが盆地の北半分を占めていた。ハンガリー人は九〇〇年までにカルパティア盆地を占拠し、九〇二年モラヴィア王国を滅してのち、スロヴァキアへの征服の道が開かれた。

カルパティア盆地を占領したハンガリー人は九世紀末から約六〇年にわたって西欧、ビザンツ、ブルガリアなどに侵攻したが、かつてハンガリー人のすべてが戦士であると考えられていた。しかし、かれらの大部分は半農・半遊牧民であった。

九・十世紀のアラビアやペルシアの地理学の記述によると、ハザール人はカスピ海北西岸地方で、冬の定住地近くに小麦を播種し、夏期には山地で遊牧し、収穫時には定住地に復帰するような半遊牧の生活を営み、ボルガ中流域のブルガリア人やウクライナや現在のモルタヴィアのハンガリー人もこのような生活を営んでいた²⁷⁾。また十・十一世紀におけるハンガリー人は、このような半遊牧生活を営んでいたことが知られている。すなわち、かれらの定住地は河川や湖の岸に沿って設定され、住民は寒冷期には漁撈にたずさわり、春には耕作、播種のうち、近くの牧草地に家畜を移し、収穫時に定住地に戻るが、家畜は寒冷期の到来まで放牧される²⁸⁾。

GY・ジェルフィ (Gyorfy) は、首領や部族首領の冬期の定住地と夏期の宿営地について、次のような点を明らかにしている。アルパードは冬の定住地にペーチ (Pecs) の近くを選び、夏の住居をチェベル (Csépel) 島に設け、かれの共治者ハザール人のクルサーン (Kurszan) はアキンクム (Aquincum) のコロッセウム近くに定住し、その後アルパードはペーチからチャローケゼ (Csallóköz) までのドナウの右岸を領したと思われる。またアルパードの

四人の息子は、ドナウ支流に沿って定住し、その領域はカロチャ (Kalocsa) 周辺に集っている。なお部族首領たちは山地の河川の水源地あたりに夏の宿営地を設けたが、仮説にすぎず、その発展はみられなかった。²⁹⁾十一世紀のハンガリー人の定住集落の起源は、農耕の発達とともに、冬の定住地が通年の定住地として固定されたものであり、一〇〇〇年頃までに三〇〇〇ないしは四〇〇〇の集落が想定され、一集落あたり一五〇から二〇〇人すなわち平均三〇〇から四〇〇の家族が数えられている。そうした集落において、牧畜が経営されていたことは、アルパード時代の集落跡から出土した家畜の骨の検証の結果から、牛二九から三四パーセント、馬一〇から二七、羊八から一九パーセント、もともと遊牧民が飼育しない豚が一五から二三パーセントを占めている。³⁰⁾一方、農耕生活を示す出土品としては、小麦、大麦その他の雑穀類や播種に貯えられた種子、あるいは、犁刃、鋤の刃、大鎌、鋤などの農具、砥石、軛などの牧畜用具があげられる。³¹⁾このような農耕と遊牧を兼ねたハンガリー人をジェルフィは半遊牧民 (semi-nomade) と規定しているが、はたして適切であろうか。³²⁾

以上のような農耕、遊牧のハンガリー人の社会は、また

階層に分化していることが、墳墓の形態や副葬品によって判別されている。

首領やその一族の墳墓はほとんど発見されていないが、サーベルや銀製容器などの副葬品とともに葬られた領主層に対して、中流層は富裕な戦士から簡単な武装の戦士までを含み、弓矢の副葬された男子とともに下層民や家僕、血縁者、犠牲獣の馬が葬られている。また弓矢の副葬された戦士たちが、二、三代以上にならわって埋葬されている墓地も発見されている。なお、下層民は家族単位に埋葬されず村落共同体の大きな墓地に葬られている。こうした共同体は小家族ないしは個人の集合から構成されていた。³³⁾イシュトーヴァン (Istovan) 一世の法令から、十一世紀のハンガリー社会における戦士階級の形成が知られているが、ジェルフィによると、それは男女合わせた人口の二六パーセントであったと推定している。³⁴⁾おもに西欧の侵攻に参加したのは、かれらであり、騎士は通常耕作、播種以前にハンガリーを離れ、収穫の季節に帰還するが、八九九年から九〇〇年、九〇四年から翌年には外国に駐留している。

九世紀末から九五五年のレヒ (Lech) 川の戦いまで、ハンガリー人はおもに西欧に侵攻し、バイエルン、ロンバ

ルディアに侵入を繰り返し、ブレーメンやオルレアンなどにも達した。略奪や貢納の要求を目的とするハンガリー人の侵攻は、長期的計画にもとづくものでなく、侵入地域の政治、軍事の情況判断に依存した。かれらはとくに農村や財宝豊かな修道院を襲い、侵略地が荒廃し、捕獲品が容易に獲得できなくなるにつれ、より遠距地に遠征した。また一方、十世紀前半には、ロンバルディアから北海に至る地域における紛争にからんだ軍事支援の代償として貢納を獲得する成果を収めている。

しかし、騎馬民族として知られるハンガリーの戦士の戦績を史料からみる限り、かれらが遊牧民の戦闘能力や戦術にかならずしもすぐれていたとはいえない。その例をあげるならば、九一七年のバーゼルの攻囲では、牧草の不足から多数の騎士を結集することができず、その機動力を発揮できなかった³⁶⁾。かれらみずから徒歩で捕虜の護送の任についている。なお、ハンガリー軍は、バヴィアを包囲し焼打ちしたほかは、都市の攻略には成功しなかった。九三二年のリアデ (Riade) の戦いでは、ドイツのハインリヒ一世麾下の重装騎士に対して逃亡、敗退している³⁷⁾。さらに九五五年アウグスブルク北西のレヒ川左岸でオットー一世の

率いるドイツ軍と遭遇したハンガリーの騎士は逃亡し、近くの村落に退いたところをオットーの騎士に包囲され、レヒ川を渡河、逃走を試みたが、河岸に配置されたドイツ軍に攻撃され、人馬ともに溺れ惨敗した³⁸⁾。十世紀はじめからドイツでは、騎士の剣を改良し、その剣を接近戦で操ることができる騎士の増強をはかった。ハインリヒ一世が王領地を領ち馬の飼育を助成したのも、騎馬の頭数を増加するのが目的であったろう³⁹⁾。このような点を考慮すると、レヒ川の戦いは、ハンガリーの軍事力の限界を示したものであったであろうし、またハンガリー軍の直接の敗因は、オットーの騎士の執拗な追討にあったと思われる。

(三)

農耕民ないしは半遊牧民としてのアヴァール人、ハンガリー人が、カルパティア盆地に定住することによって、騎馬民族の戦闘能力を失ったことについて述べたが、そのことが、ユーラシアのステップの最西部の風土とどう係りあいをもったのか、馬の飼育と牧草地との相関関係からみてもみよう。

D・サイナー (Sinor) によると、ドナウ川の東の平原 (大オルフェルド) は、約一〇万平方キロであるのに対して、かつてモンゴル人の本拠地であった現在のモンゴル人民共和国は、一五六万平方キロの面積の五分の四すなわち一二五万平方キロを牧草地が占めている。単純に比較すれば、ハンガリー平原の畜産能力はモンゴリアの約十二分の一と計算されるが、さらに時代とともに変動する沼沢や開発された耕作地の面積を差し引くと、さらに低い数値となる。馬一頭を養うのに年間一二〇エーカーのかなり良好の牧草地を要しかつモンゴルの騎馬兵のように騎士一人当り三頭の騎馬を駆使すると、ハンガリー平原では、他の家畜が飼育されないというおおよそ現実にそぐわぬ条件のもとで、約六八、四五〇の騎士を保持することが可能である。一四一年の春ハンガリーに侵入したモンゴル人に対してハンガリー王国の抵抗はたちまち崩壊し、モンゴル軍はドナウの西岸に結集し、オーストリア国境に迫り、さらに翌四二一年春には突然アドリア海に向けて南に転進した。ハンガリーを去ったモンゴル軍は、広い牧草地を求めて南ロシアのステップに定着した。このモンゴル軍の突然のハンガリー撤退は、オルフェルドがモンゴル軍の騎馬の飼料を給する

のに不十分であるとバトゥ (拔都) が判断したからと思われる。^⑧

このようなサイナーの見解に対して、リンドナーは、ハンガリー平原の騎馬飼育能力の可能性を、D・サイナーとは異なるデータにもとづいて、次のように見積っている。

ハンガリー平原は、約四二、四〇〇平方キロの牧草地を有し、これは現代のモンゴルにおける利用可能な牧草地の約四パーセント弱と計算し、一頭の馬を養うのに年間二五エーカーの牧草地が必要であると見積っている。したがって、オルフェルドは三二〇、〇〇〇頭の馬の扶養が可能であるが、馬以外の家畜の飼育や農地や沼沢が入り込んだ森林、馬の放牧による牧草の通減などを考慮すれば、ハンガリー平原における馬の飼育能力は一五〇、〇〇〇頭強であるという。また騎士一人当り一〇頭の馬を駆使するとすれば、一五、〇〇〇の騎士を保持することが可能であると仮説をたてている。^⑨

以上のようなモンゴリアとハンガリー平原における牧草地の馬の飼育能力の比較は、遊牧騎馬民族の軍事力が武装や戦術とともに、牧草地の面積によって制約されることを指示している。ハンガリーの騎士は冬の終りか早春に軍事

行動を開始するが、その季節には、ハンガリーでは飼い葉は少く、かれらが侵攻する地で貯えられた冬の秣か、ないしは春の新しい秣でまかなわねばならなかった。そして、カルパティア盆地に定住したアヴァール人もハンガリー人も農耕定住民への転換なくしては、かれらの生活を維持することはできなかった。

[注]

- (1) Procopius, De aedificiis, 4,5(Veh, O., harsg., Prokop, Werk, 5, 1977, S.207)
- (2) Diens, I., Hungarian Cross the Carpathians, 1972, p.30.
- (3) Pohl, W., Die Awaren, Ein Steppenvolk in Mitteleuropa 567-882n. Chr. 1988, S.31-37. 内田吟風は、アマヤ系遊牧民族アヴァールは、⁶ 蠕蠕(柔然)の西移した一枝で、少くとも蠕蠕に近縁のアジヤ遊牧民であったと考えられるとしている(柔然アヴァール同族論に関する諸問題、「東洋史研究」三六、六、一九六二)
- (4) Kollautz, A., Miyakawa, H., Geschichte und Kultur eines völkler Wanderungszeitliche Nomadenvolkes:

Die Joun-jan der Mongolei und die Awaren in Mitteleuropa, I, S.171-77.

(5) Pohl, W., op. cit., S.191.

(6) Pohl, W., op. cit., S.289. Bálint, C., Die Archäologie der Steppe, 1989, S.165. なお、アヴァール初期・後期という考古学の時代区分はI・ホーナに従った。

(7) この表は、バーリントの前掲書によっているが、驢馬、犬、鶯鳥などの家畜、家禽類は省略した。

動物(%) 発掘地	馬	牛	羊・山羊	豚
Eperjes	8	59	17	13
Hunya	7	60	22	9
Szekszárd-Bogyiszló	6	66	16	9
Dunaújváros- Alsófoki patak	12	53	23	8
Dunaújváros- Óreghegy	—	42	33	21
Tatabánya- Alsógalla	1 (頭)	約50		25
Óbecse, Bečej, Jugoslawien	12	52	6	6
Tarjánpuszta	3	77	10	8

- (∞) Daim, F., Das awarische Gräbenfeld von Leobersdorf, I, 1987, S.163-65.
- (∞) Wolfram, H. hrsg., Quellen zur Geschichte des 7. und 8. Jahrhunderts, 1982, S.208-209.
- (∞) Bálint, C., op. cit., S.157, 159.
- (∞) Bóna, I., Die Geschichte der Awaren im der Archäologischen Quellen (Settimane di studio del centro italiano di studi sull'alto medioevo, XXXV, Polo delle Steppe: Unni, Avari, Ungri, 2, 1988, p.453.
- (∞) Déer, J., Karl der Grosse und Untergang des Awarereich (Beumann, H., hrsg., Karl der Grosse, I, 1965, S.763)
- (∞) Bálint, C., op. cit., S.167.
- (∞) Dennis, G. T., trans., Maurice's Strategikon, Handbook of byzantine military Strategy, 1965, p.116.
- (∞) Bálint, C., op. cit., S.156-67. Bóna, I., op. cit., S.451.
- (∞) Pohl, W., op. cit., S.170.
- (∞) Bóna, I., op. cit., S.451.
- (∞) Bálint, C., op. cit., S.153-163.
- (∞) Maurice's Strategikon, p.116-17.
- (∞) Bóna, I., op. cit., S.451.
- (∞) Wolfram, H. hrsg., Quellen zur Geschichte, S.126-27, 132-33.
- (∞) Lindner, R., Nomadism, Horses and Huns (Past and Present, 92, 1981, p.17.)
- (∞) Pohl, W., op. cit., S.68-69.
- (∞) Pohl, W., op. cit., S.248-254, Bradbury, J., The medieval siege, 1992, p.10-11.
- (∞) Pohl, W., op. cit., S.316-17.
- (∞) Lindner, R., op. cit., p.17.
- (∞) Györfly, GY., Nomades et semi-nomades: La naissance de l'état hongrois (Settimane di studio del centro italiano di studi sull'alto medioevo, XXXV, 2, 1987, p.626-27.) Wiet, G, trd., I bun Rusteh: Les autours précieux, 1955, p.156-57.
- (∞) Györfly, GY., op. cit., p.627.
- (∞) Györfly, GY., Systeme des residences d'hiver et d'été chez les nomades et les chefs hongrois au Xe siècle (Archivum Eurasiae medianaevi, 1975, p.47-54, p.64-69.) ; Landnahme, Ansiedlung und Streifzük

ge der Ungar (Acta Historica Academiae Scientiarum Hungaricae, 31(3-4), 1985, S. 247-48)

- (82) Diens, I., op. cit., p. 34.
- (83) Bálint, C., op. cit., S. 208.
- (84) Györfly, GY., Nomades et semi-nomades, p. 626-29.
- (85) Györfly, GY., Landnahme., S. 248-49.
- (86) Györfly, GY., Nomades., p. 628.
- (87) Lindner, R., op. cit., p. 18.
- (88) Linder, R., ibid.
- (89) Leyser, K., Medieval Germany and its Neighbours, 1982, p. 61-62. Bauer, A., Rau R., hrsg., Quellen zur Geschichte der Sächsischen Kaiserzeit, 1971, S. 156-57.
- (90) Leyser, K., op. cit., p. 31-36
- (91) Sinor, D., Horse and pasture in Inner Asian history (Oriens extremus, xix, 1972, p. 178-81)
- (92) Lindner, R., op. cit., p. 14-16.